

## エッセイ 中東奮闘記―湾岸50年、オイルマンの軌跡

### 第八回 アラブ人のまっ只中で

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

#### 8-1. オマーン赴任 - 近代化が進むマスカット

1992年1月10日(金)の午前9時。アルファラジュ・ホテル6階のベランダから見降ろす休日のマスカットの通りには車も歩く人の姿もなく、閑散としていた。目を先に転じると、2階建ての一戸建住宅群の先にビルが林立し、さらにその先には岩肌むき出しの山並みのパノラマ、「オマーンに来たんだ!」という実感が湧いてきた。

前年の9月末で58歳定年退職となった私は、もう一度中東で仕事をしたいと思っていた。その希望が叶って、私はオマーンにいた。仕事は、JICA(国際協力機構)専門家、勤務先はオマーン商工省。

東京を前日の午前10時30分発のタイ航空で飛び立って、バンコク経由でマスカットに着いたのが午後11時。空港には大使館員や先任のJICA専門家たちが迎えにきてくれていた。ホテルに着いたのが午前1時近く。一晩ぐっすりと眠り、起き出して私は街の様子を眺めていた。

私にとっては今回が3回目のオマーン訪問。最初は1974年。製油所建設プロジェクトのフィージビリティ・スタディ(feasibility study)を行うため丸善石油社員としての出張であった。カブース国王が即位して間もないころで、マスカットは昔のアラブの街の姿であった。当時、このアルファラジュ・ホテルは平屋建てであった。

次が1985年、アブダビ興産業務部長として市場開拓を狙ってのオマーン出張であった。オマーンは、近代化のまっ只中にあった。マスカットの街中が工事現場、走行するトラックが巻き上げるもうもうたる砂塵に包まれていた。中東随一を誇るアルブスタン・パレス・ホテルがまだ建設中で、コンクリートむき出しのままの姿であった。7年ぶりのオマーン。近代化された街には、目を見張るものがあった。

1980年代に入って、マレーシアのマハティール首相が日本の近代化を手本とすべく「ルックイースト」政策を提唱した。近代化を目指すオマーンも例外ではなく、日本から学ぼうという風潮が広がった。JICAに開発調査を依頼し、大勢の研修生を日本に派遣し、1986年からは農業省、漁業省、商工省、石油ガス省などでJICA専門家を受け入れた。

石油依存から脱却する主要政策の柱である工業化促進を担う商工省も、1989年からJICA専門家を受け入れた。そんな中で、私はオマーンに赴任した。

商工省での言語は英語、こちらはなんとかなる。しかし、中小企業振興という業務には経験がない。「仕事が勤まるかな。大丈夫かな」と不安を感じながら私は、ベランダからマスカットの街の写真を撮るべく、カメラのシャッターを押し続けた。

3月には、妻が日本からやってくる。2人の娘たちは成人して良き伴侶を得て落ち着き、これからは妻と2人だけの暮らしとなる。「マスカットの様子を出来るだけ多く知らせなければ」との思いであった。

翌日、オマーン商工省に初登庁した。所属先は工業局工業開発部。カウンターパートは、大学出の男子3名（内1名が部長）と女子2名の5名。それに秘書兼タイピストの高卒女性2名を加えて、総勢7名。部屋は男女別々であった。かくして、私はオマーン人の若者たちのまっ只中で働くこととなった。

この部の仕事は、調査研究、企業診断、フィージビリティ・スタディ、情報サービス、教育訓練であったが、オマーンでは1992年が前年に続いて「工業年」と定められたため、その目玉行事として工業開発部では、経営者セミナーと5S運動（整理、整頓、清掃、清潔、躰の5S）が進められていた。

登庁1日目は、前任専門家のオリエンテーションや省内挨拶、日本大使館訪問などで終わった。大使館へ行く車の中から見るとマスカットの街のきれいさには驚いた。昨夜は暗くて気付かなかったが、高速道路にはゴミ一つ落ちていなかった。国王が清潔好きなのだという。イスラムの教えにも、「Cleanness is next to faith（清潔は信仰に次ぐ）」という言葉があると聞いた。

マスカット市は、急峻な山で区切られたいくつかの街から成り立っていた。古い歴史を持つマスカット旧市街、そこから一つ山を越えるとマトラの街、次に山を越えるとルイの街、次にクルム、それからマディナット・カブースというように、山で囲まれた盆地が市街地として順次開発されて、市は大きくなっていった。その先に、シャティ・アルクルム、アルホエール、アザイバ、ボシェール、シーブなどの地区が続く。

各地区間を近代的な高速道路が通っていない。マスカット市は、緑もかなりある。他の湾岸諸国と違って、山もある。3000メートルを超す山があり、そこに雨も雪も降る。その水が地下を流れ下る。そのため、オマーンは比較的水の豊富な国であった。

マスカット旧市街やマトラ地区は昔の面影を留めていたが、ルイのビジネス街、クルムの商店街、それにアルホエールの官庁街には近代的なビルが立ち並んでいた。かつては、外人が泊まれるホテルはアルファラジュだけであったが、今回の訪問時にはアルブスタン・パレス・ホテルを初めとしてデラックスホテルがいくつか建設されていた。

前回の訪問時とは違う新生マスカットであった。

## 8-2. カウンターパートたち - マスカットの職場事情

商工省でカウンターパートたちと働いている間に、オマーン人や社会などのことがいろ

いろと分かってきた。

まず、挨拶。朝、役所に来る。オマーン人は、「サバハ　ヘール。シェ　アハバル？　シェ　エルーム？（お早う、なにかニュースがありますか？科学的な情報はありますか？）と必ず挨拶を交わす。「気に入らないヤツには挨拶をしない」というようなことはない。会う人やそこにいる人全員に必ず挨拶をする。

この国では、挨拶をしない者は一人前の大人として認められない、犬・猫並みということが分かった。ただ、その後で、「家族は元気か？」と聞き、「おかげさまで元気だ」、「そちらの家族は元気？」、「おかげさまで元気」、「ところで・・・」などと時間お構いなしに挨拶が延々と続くのには、閉口した。

カウンターパートは英語が達者だった。ネイティブ並みのうまさの者もいた。外国人にも慣れていて、オマーンが昔から外の世界に開かれていたという歴史のせいもあろう。私が一緒に働いたカウンターパートたちは超エリート、政府留学生として、アメリカやイギリスの大学を卒業していた。

職場の女性たちは髪を隠すヒジャブは付けていたが、顔を隠すようなことはなく、服装も派手な柄物を身に着けていた。彼女たちは、ほとんどが自分で車を運転して颯爽と登庁していた。私の想像とは違った。

私が着任した頃の頃、オマーンではよく雨が降った。私がオマーン人女性スタッフに「今度、雨が降ったら、一緒に写真を撮ろうか」と軽口を叩いたら、「OK」と答えが返ってきた。「あれは、言い過ぎだったかな」と悔いていた。

ある雨の日、その女性から「ミスター・エンドー、今日は雨よ。カメラある？一緒に写真を撮ろう！」と誘われた。「いまさら、断る」という選択肢はなかった。そこで、日本人のおじさんとアラブ女性との相合傘の写真撮影が実現した。私にも初体験、他の湾岸諸国では当時考えられないことであった。

女性たちは、わが家にも来てくれた。その時には、弟や従兄弟などの男性が必ず同行した。それが当時オマーンでは一般的であった。役所では部屋は別であったが、仕事は女性も一緒。会議でも顔を突き合わせて議論をした。しかし、仕事で車で出かける時は同じ車には乗ったが、横に座ることは決してなかった。前の席か後の席に分かれた。男女隔離は残っていた。

工業開発部の部長は、アリ・アルスネイディ。アメリカの大学卒の当時28歳の青年であった。地方のシェイク（首長）の息子。能力、見識とも優れ、英語力も抜群であった。彼とはとくに親しく付き合った。訪日中に横浜のわが家にも来たこともあった。オマーンでは一緒に砂漠を訪れ、わが家にもよく立ち寄ってくれた。

単身か子供連れで立ち寄ることが多かったが、ある時に奥さんを連れてくると言う。「奥さん？本当に来るかな」と訝っていたら、子供たちとともに奥さんもやってきた。見ると、色白で美人。通常アラビアでは、奥さんは外国人の家には来ない。妻とびっくりしたことを覚えている。

以下、カウンターパートを男女一名ずつ紹介する。

マラックは、アメリカの大学卒の才媛。彼女はアメリカに留学中にオマーン人のご主人と知り合って結婚。いここ結婚が多いオマーンでは、当時珍しい恋愛結婚。ご主人も帰国後、オマーンの役所に就職した。彼女は2人の男児の母親であったが、日本人の共稼ぎ夫婦と変わらない生活ぶりであった。スリランカ人のメイドを雇っているので家事の心配はなかった。オマーンは働く女性にとっては、日本より快適な環境にあった。マラックが妊娠をした時に、1年間の休暇をとったことにも驚いた。当時の日本では、結婚すれば会社を辞めるのが普通であった。

サリムは、マスカットから南約280キロのアル・カミル出身。彼は週日は数人で借りているマスカットのアパートから商工省に出勤し、週末には妻子が住むアル・カミルの家に帰る生活をしていた。実家では馬を飼っており、週末は乗馬を楽しんでいると聞いた。

彼の誕生日は西暦の1月1日生まれ。日本では、元旦生まれは、珍しくめでたいとされているが、オマーンではよくあることだった。当時商工省でも、6割か7割が元旦生まれだったかもしれない。オマーンが近代化する前には、生まれた年も日も分からない状態であった。したがって、外国へ行くためにパスポートなどで誕生日が必要になった時に、多くの人が分かりやすい1月1日にしたのだった。

サリムには、兄妹が36人いると聞いた。お父さんに4人の奥さんがいたとのことであった。私は、12人姉弟である。一番上が姉で、あとの11人は連続して男兄弟である。母親は1人。こうなると、私の独壇場であった。「私の父がアラブに生まれていて、4人奥さんを持ったとする。そうすると、私は48人姉弟の筈」と言うと、オマーンの人たちもびっくり。しかも、男の子が11人いるからサッカーチームでも野球でもチーム「エンダーズ」ができると言えば、さらに感心したようだった。

### 8-3. ミート・ザ・ピープル-カブース国王の巡幸

1992年4月のとある日、商工省への日本人客をオマーン内陸部のニズワ方面に案内し終えてマスカット方面に戻り始めたころのことだった。人々が三々五々、道路に集まり始めているのに気が付いた。

中には国王の写真を掲げている人もいた。「なんだろう」と訝りながら、さらにマスカット方面に車を走らせると、集まる人の数も徐々に増えてきて、一部では踊りも始まっていた。「ひょっとすると国王が通るのかな」と思いながらさらに車を走らせると、空中にヘリコプターが飛ぶのが見え、やがて前方からやって来たオートバイに乗った警官が「そのまま停止して待つように」とわれわれの車に指示した。訊くと、やはり国王が通られるのだという。

ここはマスカットの90キロ手前の土漠の中。国王の写真や歓迎のスローガンを書いたボードを掲げて、あちこちの村から集まった人々で道路際が埋め尽くされている。中には、

先生に引率された学童たちもいた。国王の一行は一向に見えない。1時間近くは経ったころだろうか、はるか先に歓声が上がった。いよいよ来られるようであった。歓声が徐々に近づいてくる。周りは、押すな押すなの大混雑。

目の前を、白い房を車の両脇に垂らした四輪駆動車が通りすぎた。カブース国王だ！写真で拝見するとおりの白いひげの国王が、自らハンドルを握って車を運転されていた。人々が代わるがわる国王の車の前に飛び出せば、白い花や赤い花を車に投げかけた。国王の写真が掲げられ、国旗が振られた。

国王の車の後に、国王顧問や大臣たちが助手席に乗る四輪駆動車が続く。さらに、その後に軍隊の車両が延々と続く。大砲を積んだ車、機関銃を構えた精悍な面構えのオマーン兵士が乗る車が次々に目の前を通過して行く。おびただしい車の数であった。通る兵士たちのほとんどが手を上げて挨拶をしていく。一行の野宿用のテント、水、薪、ガソリン、トイレなどを積んだ車もその後何十台と続く。総勢何百台の車、数キロにも及ぶ壮大な行列であった。

これが、私が初めて国王の「ミート・ザ・ピープル」の行列に遭遇し、カブース国王を間近に拝顔した時のことであった。「ミート・ザ・ピープル」とは、1970年の即位以来、ラマダン月に入る前にカブース国王が自ら車を運転しながら国内を回り、国民と膝を交えて国民の声に耳を傾け、それを政治に反映させるためのオマーン独特の国内巡幸である。

私がその「ミート・ザ・ピープル」の行列に遭遇した2週間後、オマーン人の若者が商工省を訪ねてきた。聞いてみると、若者はニズワ近くのマナでキャンプ中だった国王に会いに行き、「自動車整備工場を始めたい」と相談したら、「『商工省のアドバイスを受けて、よく検討するように』」との話だった。それで商工省に相談に来た」ということであった。

「君は本当に国王と話をしたの？」と訊くと、「2回、話をした」と答え、国民と国王の距離の近いのに驚いた。「ミート・ザ・ピープル」で一般の人が道路に飛び出して国王の車目がけて花などを投げかけるのを見た時にも、私はその近さを実感していた。

#### 8-4. 砂漠のキャンプ - アラブのジョークに

オマーンに来て4ヶ月が過ぎようとしていた5月上旬に、アリ部長のアレンジで砂漠のキャンプに出かけることになった。行く先は、ワヒバ砂漠。宿泊地は、マスカットの南400キロのアラビア海に面したマシーラ島に近い場所。

参加者は、マスカットからオマーン人が約10名、英米の男女3名、日本人男女6名、それに現地参加のベドウィンの人たち約20名の総勢40名。日本人は、私たち夫婦と同僚のJICA専門家の落合夫妻、それに大使館の野ロー一等書記官と日本大使館参事官夫人が参加した。

まずは、着る物をどうするか。私と妻は強い日差しを避けるのにもトイレのない砂漠で用を足すのにも、アラビア服が一番便利であることは知っていたが、そこまですることも

ないだろうと、汚れてもよいズボンと長袖のシャツを着ることにした。当時マスカットの気温はすでに40度を越えていたが、「オマーン南部は年間の最高温度が30度を超えることはない、夜間は寒くなる」とアリ部長が言う。訝りながらも、言われるままにセーターも用意した。

次に、寝具の問題。砂の上に寝ることになるので、マットレスか筵が要る。それに、上にかける毛布。妻は寝袋が欲しいという。どうせ雑魚寝になる。女性には寝袋の方が身の安全だろうと考えて、私は私用に筵と毛布、妻には寝袋を用意した。

当日、時間遵守意識の希薄なオマーン人グループがなかなか集まらずに、予定よりかなり遅れた午後6時過ぎに7台の四輪駆動車を連ねて、私たちは、マスカットを出発し、8時にアル・カメルの街に着いた。外は真っ暗になっていた。ガソリンスタンドが集合場所だったが、車の数が1台足りない。発電機を積んだオマーン人ハミースが乗った車だ。

突然アリ部長が私を助手席に乗せて、凄いスピードで来た道に戻った。10数キロは戻ったであろうか、部長が暗闇の中のハイウェイを急旋回、「居た！」という。私にはまったく見えない。近づいてみると、なるほど反対車線にハミースの車が止まっていた。部長はインテリだが、奥底には砂漠の民ベドウィンの血が流れているのだろうか。この暗闇の中で、こんなにも物が見えるのには感心した。

ハミースの車を先導してアル・カメルガソリンスタンドへ引き返し、一同揃って真っ暗な道を50キロ先のアシュハラ街へ。ここから、砂漠に入る。街のエア抜き場で、砂漠でスタックしないようにタイヤのエアを抜く。準備完了。案内してくれるベドウィンたちも砂漠からそこに迎えにきていた。車はここで舗装道路とはお別れ。土漠のガタガタ道へ乗り入れた。

「アラブでは、3つの場合に親、兄弟の殺し合いが許される。1つは政権をとるため、2つ目は改宗のため、3つ目は女性の取り合いのためだ。ただし、昔のことだよ」。こんなアリ部長の話聞いて走っている間に、遠くにポツンポツンと灯りらしいものが見え始めた。私たちは、土漠から砂漠に入り、砂漠の中を車の轍を頼りに走った。

しばらく走ってから、車は道はずれて砂地に入った。なにも見えない真っ暗な中を、タイヤを砂に食い込ませながら進んだ。空には、すでに星が瞬いていた。再び、遠くにポツンと灯が見えた。車は、その灯を目指して進む。急に低い灌木がまばらに生えている小山が視界に浮かび上がり、車はそこを登って止まった。

そこがキャンプ地であった。そこには、砂に突き刺された長い木の棒の先につけられた裸電球が2つ、3つと薄暗く灯っていた。車はこの灯りを頼りに砂漠の中を走ってきたのだが、ベドウィンの案内がなければ、到底辿りつけない場所であった。時計の針は夜の9時を回っていた。

「マサラヘル（こんばんは）」、「サラマレーコム（ごきげんよう、貴男たちの上に平安がありますように）」、「アレコムサラーム（ごきげんよう、そしてあなたたちの上にも平安がありますように）」の挨拶が飛び交う。私にとっては、1970年代末にアブダビのリワ

砂漠に行って以来の久しぶりの砂漠であった。

裸電球を点すのに唸りを立てて回る発電機の奥の暗がりには、すでにテントも幾張りか張られていた。波の音が近くに聞こえる。ここは、海辺なのか、海がどこなのか真っ暗でまったく見当がつかない。

電灯の下では、薪が赤々と燃やされていた。ベドウィンたちは大鍋で料理のまっ最中。傍らに繋がれている3頭の山羊は明日からのわれわれの食料用の筈だ。そういえば、山羊の毛皮が1枚砂の上に転がっている。すでに1頭は、この大鍋の中なんだと気付いた。

テントに各自の荷物を置いて、砂の上に敷いた分厚いラクダの皮の上に一行が車座に座ると、まずは、オマニコーヒーでもてなされた。ベドウィンの中には、白いひげの長老もいる。

やがて料理が運ばれる。時計は10時半を回っていた。その夜の料理はアルシーヤ。炊いた米に山羊の細切れの肉を混ぜた大鍋を木の棒でつきながら作る料理だが、これなら肉の量の多寡で食べる者に不公平が出ないのだと聞いた。結構いけた。日本人も欧米人も、オマーン人も入り混じっての夜の食事。食事が済むと、またオマニコーヒー。「シュックラン（ありがとう）」「アフワン（どういたしまして）」。時計はもう12時に近い。

食後は、砂漠での歌と踊りの宴となった。人びとの円陣の真ん中にリュートを奏でるハミース、太鼓を打つアリ部長、その左右に歌い手が3、4人。まずは、部長の友人でオマーンの代表的な歌手のハーリッドのソロ。リュートを奏でながらの哀愁を帯びた恋歌が砂漠の闇に流れる。

その後は歌合戦。左の組が1節歌い終わると右の組が1節歌う。連歌のようだ。その掛け合いが果てしなく続く。円陣の中では、2人1組のベドウィンが踊る。踊るといっても両足を揃えて跳びはねる。「まるでカンガルーみたいな踊りだ」と思うと、今度は2人が男同士で肩を組んで、片足ずつ上げたり回ったり。1人は女性を演じているらしい。女形だ。

夜中の1時を回る頃に、パーティーはお開きとなった。テントに入らずに砂の上に寝る者も多かったが、われわれはテントに引き上げた。

朝方、近くにキーキーと聞きなれない音がする。何かとしてみると、ラクダだ。3頭ほどが、テントの周りをうろついている。踏み潰されなくてよかったとホッとす。

起き出すと、そこは浜辺で海までは100メートルほどの距離。「サバハヘール」、「サバハヌール」の朝の挨拶。それが一通り終わると、朝の洗面。かねて用意のプラスチック製の器と2リットルのミネラルウォーター1本ずつをぶらさげた私と妻は、テントと駐車している場所から30メートルほど離れた灌木がまばらに生えている小山の陰で順番に見張り役をしながら、用を足した。

それにしても、ベドウィンは水を使う天才である。彼らは200ミリリットルの1本のペットボトルで歯を磨き、顔を洗い、お尻までちゃんと洗う。さすが水が貴重な国の人びとであった。

朝食はオマニパンとオマーン式オムレツ、ミルクやソフトドリンク、それにオマニコー

ヒー。

食後しばらく談笑した後で、いよいよ砂漠のサファリ（探検の旅）に出発した。四輪駆動車4台を連ねて、海に沿って30分ほど西へ。掘っ立て小屋のベドウィン部落をいくつか通り抜けてから、右手の砂漠に入った。砂漠は平坦ではなく、うねっている。20～30メートルの山を駆け上がっては駆け下りる。ジェットコースターに乗っている気分。スリル満点。

時には1回では上りきれずに、戻ってやり直し。「ほら、もう一息。上がった！」と思う間に、また次の谷底に。前方には新たな砂丘、高さは30メートル以上はある。1台の車が挑んでいる。「さあ、どうだ。登れるか。もう一息だ。やった！」。次は私たちの番だ。車のエンジンが唸る。登る。「成功、やった！」と一斉に歓声が上がる。

砂丘の嶺を全速力で走る。ランドクルーザーが跳びはねる。「あ痛っ！う」と頭を思いっきり車の天井にぶつける。両手で座席にしっかりと掴まっても、このあり様。

さあ、ここからは下り。「ちょっと待った」。運転しているアリ部長が、車から降りて慎重に砂を読んだ。ゴルフでは芝を読むが、ここでは車がスタックしないように砂を読むのだ。前方の砂丘の頂では、大財閥の息子のムルタダの車が砂に埋まり、砂を掘って車を持ち上げている。私たちの車は慎重に砂を読んだおかげで、無事に砂丘を駆け下りた。大きな拍手。砂漠のサファリは、大人たちをも興奮の渦に巻き込む。

もう昼の12時近い。テントを出てから、4時間は経っている。昼食のために、宿泊地に戻るようになった。途中ベドウィン部落に立ち寄る。木切れで作った掘っ立て小屋が30戸ほど点在している。子供たちが大勢寄ってくる。気温が高く砂も熱いだろうに、みんな裸足だ。ありったけのキャンディを子供たちに配った。

部落の広場には、ガソリンスタンドがあった。元オイルマンの私には、特別に興味深かった。スタンドといっても、ドラム缶3～4本が台の上に置かれ、それに繋がれた管が支柱からぶら下がっているだけである。驚くなかれ、給油の時には、その管に口を当てガソリンを吸い出して給油するという。この原始的な給油所は滅多に見られる代物ではないと、私は夢中でカメラのシャッターを押した。

砂漠の2日目は星空の下で寝たいという妻の希望で、私と大使館の野口と参事官夫人と一緒にテントを出て野宿することにした。テントから30メートルほど離れた所の砂の小山の周りで適当な間隔をとって男女別々に寝た。辺りは真っ暗、真上には満天の星。星が動くのまで見える。各々がこの壮大な宇宙の営みを独り占めにできる、最高の贅沢だ。

風がやや出始めて目が覚める。「いま何時だろう。まだ朝4時か。寒い。たしかに冷える！毛布一枚で大丈夫かな」と身をこわばらせていると、人の声。寝ぼけ声の野口が妻とひそひそ話をしている。

「寒いからテントに戻りましょうか」と妻の声。「テントが空いているかどうか見てきます」と野口の姿が闇に消えた。やがて戻ってきた彼は、「テンとは満員です。ここで、仕方ないですね」という報告だった。私たちは寒さに耐えながら、そのまま砂漠で夜明けを待



った。

翌朝、野口が「朝は驚いた。寝ていたら、突然肩を叩かれた。ラクダが来た！と思った」と話した。訊いてみると、妻が「寒いからテントに戻ろう」と私に話しかけるべきところを、暗闇の中で間違っただけで野口の肩を叩いてしまい、彼は昨日の朝に近くをうろついていたラクダの記憶から妻をラクダと間違えたようであった。

朝食時にこの話を聞いたオマーン人たちは大笑い。中には砂の上を笑い転げる者もいた。話題の少ないところでは、こんなことでも大事件になる。この話はまたたくまに一行の話題をさらうこととなった。その後マスカットに帰ってからも、この話がオマーン人社会に広まったらしい。アラブのノクタ（アラブのジョーク）にまで成長してしまったようだった。

朝食が済んでから、キャンプ地は解体。テントが畳まれる。料理に使った大鍋が、ドラム缶の水を上手にを使って洗われる。ゴミが焼かれ、発電機がピックアップに積まれる。あつという間に片付いた。その後、参加者全員で記念撮影。ハンジャル（短剣）をつけたもの、鉄砲を持った者さえいた。

「マッサラーマ（さようなら）」、「フィアマネラ（またね）」の挨拶を交わして、各々がランドクルーザーに分乗して一路家路へ。忘れ難い3日間の砂漠への旅はかくして終わった。

## 8-5. ホルムズ海峡 - 石油輸送の要衝

1993年、畏友の小山茂樹が研究者1名を伴って、オマーンに来ると連絡してきた。「オマーン訪問中、誰に会いたい？」と訊くと、「ない。ホルムズ海峡を見たいだけ」ということだった。中東や石油に関する本を数多く出版していた小山は、国際石油輸送の最重要ルートであるホルムズ海峡を自分の目で見て、自分の肌で感じたかったのだった。

ホルムズ海峡に行くには、船が要る。商工省次官に協力を求めると、ムサンダム出張所から船と案内人を出してもらえることになった。埴治夫大使にムサンダム行きの話をする、「私も同行したい」と言われるので、4人で出かけることになった。

ムサンダムは、面積1,800平方キロのオマーンの飛び地領で、当時の人口は約3万人。当時マスカットからここに入るには、州都のカサブへ空路に行くのとソハール・ダバを経由して陸路で入ると、マスカットからドバイに飛行機で飛びそこから陸路カサブを目指す方法があったが、われわれはマスカットからの空路を選択した。

当日、飛行機はマスカットを出てから左手に3千メートル級の西ハジャールの山並みやUAE領のコールフアッカンの町を見ながら、オマーン海沿いをひたすら北上した。小1時間ほどすると、高く急峻な山が、静穏な海に面して切り立つ様が目に飛び込んできた。入り組んだ山裾に、白い線がまわり付いている。波だ。アラビアでは見たこともない景色であった。まるで北欧のフィヨルドのようだ。20キロもフィヨルドが続くハバレイン・

ハワル（入り江）だったのか、あるいはシム・ハワルだったのか、確かな場所はわからないが、ムサンダムが「中東のノールウェー」と称されるゆえんであった。

まもなく到着したカサブ空港では、商工省ムサンダム出張所の2人の役人が出迎えに来ていた。宿泊はカサブ・ホテル。

翌朝、まずムサンダムの山岳地帯へ。西ハジャール山脈始点のムサンダムのほとんどが2000メートル近い山地。われわれは車で、最高峰の2087メートルのジャバル・ハリムを目指して山道を登った。

途中、道路沿いの切り立った岩山のあちらこちらに、くり抜いた穴が開いていた。「昔の住居跡だ」と聞いて、「こんなところに人が住んでいたのだ」と驚く。やがて、緑の耕作地が突然現われる。高度1,800メートルのサヤ高地。そこここにドイツの木も散見される。平坦な緑の景色。

ジャバル・ハリムにはレーダー基地があるため登れないので、サヤ高地からワディ・サル・アルアラまで降りた。そこから右折して、車を止めて見渡すと、眼下に岩山を曲がりくねりながら海まで続く道と、その先に深く切り込んだ入り江が見下せる。ナジド・ハワルである。

近くにあるハルディア公園の切り立つ岩山の麓の緑地は、地元の人がピクニックによく訪れる場所と聞いたが、われわれはパスして山道をカサブの町へと降りた。港には多数のボートが碇泊し、声高に乗客を寄せ集めている者や乗客たちで賑わっていた。ホテルへの帰途、スークに立ち寄る。商品は、多種多様で豊富。ここは、イランとの貿易の最前線の地。イラン人バイヤーも多いと聞いた。

午後は、ムサンダム半島西岸にあるUAEとの国境まで出かけた。左側の削り取ったような岩山、山裾を海沿いに曲がりくねる道、その先に広がる青緑色（ペルシアン・ブルー）の海の眺望が素晴らしい。UAEとの国境の町、テイバットで引き返した。

翌日、カサブの港から、商工省の船でホルムズ海峡に向った。商工省の役人を含めて一行6名。船が思ったより小さい。それに当日は風が出ていて、海面には白い三角波が立ち始めていた。「大丈夫かな。次官に商工省の船ではなく、海軍の軍艦に乗せてもらうように頼むべきであったか」と悔やんでみても、あとの祭り。

広い海に出て30分ほどすると、左手に島が見えてきた。ホルムズ海峡を監視するレーダー基地がおかれている、ガネム（山羊）島だ。波止場の先の建物の窓には、オマーン人兵士の姿も見える。ここがイランと対峙する最前線基地、緊張感が走る。

ホルムズ海峡は、ペルシャ湾とオマーン湾の間にある巾約33キロの国際海峡である。国際海峡とは、国連海洋法条約によって定義された国際航行を定められた範囲で自由に航行できる海峡のことである。ホルムズ海峡は、世界の消費量の約20パーセントの原油が運ばれる最重要な国際海峡の1つである。日本の場合は、原油の約80パーセントがこの海峡を通ってもたらされるのである。

いつの間にか、われわれの船はホルムズ海峡に入っていたようであった。海が開けてい

る。前方に大きな島影が浮かび上がる。イランのケシム島のようなものであった。もやの中から、左手に黒い影が現われたと思ったら、その影がぐんぐんと近づいてきた。高い。山のように見えた。タンカーである。「舷側に近付いて、乗組員に手を振りたいものだ」と思ったが、海が荒れてきていて叶わない。

小山が「これでホルムズの雰囲気分かった。大使も乗船されている。危ないことはできない。帰ろう」という。見ると、大使も波の高さを気にしておられる様子でもあり、客人の指示に従って、そこでホルムズ海峡を後にした。

同行の商工省の役人は、いたって純朴かつ誠実。荒天などは気にせず、見るべき場所を一つ一つ丁寧に案内してくれた。次に向かったのは、ムサンダム北端にあるクムザ。ホルムズ海峡からは数マイル。ここは船以外に交通手段のない場所。アラビア語、ポルトガル語、ペルシャ語、インド語と英語が交じり合ったクムザ語が話されているとか。日を浴びて光るペルシアン・ブルーの静穏な入り江の先にあった、クムザ村の白い建物がいまでも記憶にある。

それから、時計と反対周りに半島を廻って、シム・ハワルの入り江や湾をくまなく巡航。ムサンダムの代表的なフィヨルドの景色を堪能。最後に、「電信島」に立ち寄る。この島は1864年から1869年までイギリスの電信ケーブル基地があったので、こう呼ばれている。船から、基地の廃墟らしいものが見えた。そこからカサブに戻った。

最終日は、カサブ城を見学した後に商工省ムサンダム出張所に立ち寄る。たまたま数人の人が集まっていた。見ると、持つ部分に斧が付いたジャーズと呼ばれる杖を持っている。ムサンダム独特のもので、オマーン本土では見られない。われわれはムサンダムの歌と踊りを所望し、ジャーズを持った独特の踊りを堪能してマスカットに戻った。

## 8-6. ワヒバ砂漠探検ツアー - せめて山羊だけでも

日本人会の「ワヒバ砂漠探検ツアーを企画したいが、協力してもらえないか」という依頼があり、私は当時工業局長に昇進していた商工省のアリに話を通してアレンジを頼んだ。彼の尽力により、1993年9月、日本大使を含む日本人15名とアリ局長も含めて現地の人々20名を加えた砂漠ツアーが実現することとなった。

マスカットまでわざわざ迎えに来てくれたベドウィンの代表の人たちに先導されて、一行が向かったのは前回と同じマシーラ島近くのアラビア海に面する海浜。

初日は、夕方近くに現場に到着。現地の海はモンスーンの影響で波が高かったが、磯でムール貝やモンゴウイカを手づかみで採った。夕食は、磯で採ったものと山羊肉のバーベキュー。野趣あふれる料理に、一同大満足。

とっくに日が沈み、昼間熱砂であった大地の空気もひんやりと冷えてきて、仰ぎ見ると月が出ていた。満天の星もきらめいている。ベドウィンの人々とゆっくりお茶とおしゃべりを楽しんだ後は、歌と踊りの競演。

ウードの音色と太鼓の音の中、ある者が歌うとそれを受けて別の者が歌う。またそれに答えるように歌う。私の妻も含めて日本人からも何人かが、踊りに加わった。宴は2時間にも及び、一行が眠りについたのは午前零時近くになってからのことであった。

翌日は、砂漠の中のベドウィンのテントを訪ねた。われわれが着いた時には、近所に不幸があり、主人は不在であった。家には、10数人以上の成人女性や子供たちがいたが、応対したのは、長男とおぼしき12、3歳の男の子。成人の女性がいるのに、テントでの応対、周囲の見学、写真撮影などをすべて見事に取り仕切った。そのリーダーシップと貫禄には脱帽した。

1時間ほど滞在して、次の目的地に向かうべく砂丘の中をしばらく行くと、前方から1台の四輪駆動車がやってきた。さっきの家の主人らしかった。その車が停まり、われわれの車列も停車。やがて、大声が聞こえてきた。「何が起こったのだろう」と訝っていると、しばらくして「ようやく話し合いがついた」と、アリ局長が報告にきてくれた。

聞いてみると、「もうすぐ昼時、わが家で昼食を差し上げたい。昼食も出さずにみなさんに帰っていただく訳にはいかない。もう一、度わが家に戻ってもらいたい」というのが先方の言い分。わが方は、「ご好意はありがたいが、これから行く所があり時間がない。あしからず」と説明したが、先方はどうしても承知しない。それで言い合いになっていた由。

先方からは、「どうしても時間がないならば、代わりに、山羊を1頭持ち帰っていただきたい」との申し出。こちら側も「そこまでおっしゃるなら、いただきます」ということで、ようやく話し合いがついたという。

砂漠の民ベドウィンのホスピタリティについて話には聞いていたが、私はここでその真髓を知らされた。当時、その山羊の値段は200リアル(約7万円)。けっして少なくない金額だった。

その後、われわれは砂漠のドライブ。いくつもの砂丘の上り下りを楽しんで、着いたところが小高い砂丘の上。底を覗きこむと、すり鉢状に数十メートルの傾斜が続いている。そこを一台ずつ車がゆっくりと降りる。スリリングな降下である。下り始めると、「ぶーン」と砂が唸り出す。泣き砂である。キュキュと音がする日本の泣き砂とは、スケールが違う。急勾配の丘を降りるに従って、砂の唸り声は、「ゴー、ゴー」とジェット機のエンジン音に変わる。車が降りる時に、砂がその底に向かって崩れ落ち、それが周囲に反響して生じる音である。轟音であった。

私にはアブダビのリワ砂漠で聞いて以来の音であったが、同行の日本人にとっては初体験。珍しい体験をした後に、われわれは2日間の砂漠の旅を終え、マスカットに戻った。

話は変わるが、マスカットの南東約300キロのところに、ラス・アルハッドという有名な海亀の産卵場所がある。翌年10月、大使ご夫妻も含めた日本人会有志25名で数台の四輪駆動車を連ねて家内と一緒にこの地を訪ねた。

夕方6時に到着すると、世話係のオマーン人たちが果物、ハルワとオマニコーヒーで歓迎を受け、あらかじめ用意された夕食を終えたところで、オマーン環境省の役人の方が、

生後30日目、40日目、50日目の子亀の入った瓶を持って、海亀についての説明のために来てくれた。

「この海岸に産卵のためにやってくるのは、アオウミガメ」、「満月の夜に陸に上がる」、「30分から45分かけて、1回に90個から150個の卵を産む」、「それを3回繰り返す」、「卵は60日で孵化する」、「子亀が生き延びられるのは3,000匹のうちの1匹だけ」、「生まれたばかりの子亀をキツネ、鳥やカニなどが狙って食べる」とのことであった。

こんな説明を聞いている間に、高く上がった満月が辺りを明るく照らしていた。9時半過ぎ、海亀が陸に上り始めているというので、私たちはわれ先にと海辺に走った。目を凝らすと、いる！いる！あちらこちらに大きな海亀が、海岸から砂丘を目指して一生懸命に這い上がってきていた。海亀は砂のくぼみに入り、前足で砂を掘った。やがてお尻から卵を産み始めた。ポトリポトリと卵が砂のくぼみに産み落とされる。親亀の方は、両目に涙をため、苦しさにのたうち回っているにも見えた。生命の神秘に感動する。

その夜遅くなって、煌々たる月光の下を無数の孵化したばかりの子亀が海を目指して一斉に走り始めた。それはいまでも忘れがたい光景であった。数えきれないほどの鳥やカニが一斉に子亀に飛びかかった。キツネも来ていたように記憶する。子亀が海に入る前に襲われて命を落とすのだ。目の前に繰り広げられる、非情な弱肉強食の世界！見ていると、ほとんどが捕えられる。海の中にまでたどり着けるのは、数えるほどしかない。海に入っても、子亀には敵や多くの危険があろう。私は、子亀の安全を祈らずにはいられなかった。

感動の2日間の海亀ツアーであった。

## 8-7. オマーン観光案内 - オマーンで何するの？

1994年2月3日の夕方6時過ぎ、私は不安な気持ちで家にいた。その日の朝、砂漠ツアーにでかけた日本からの女性3人がまだ帰ってきていなかった。帰宅は5時半の予定。今日のドライバーは、若いノルウェー人男性。「事故があったのかな、女性たちの身になにかあったのではないかと気をもんでいた。外は、暗くなり始めていた。

家内から「また貴方の心配性が始まった！」と言われている中に、くだんの車が戻ってきた。家から迎えに飛び出すと、3人の第一声が、「楽しかった！」。遅くなったのは、帰路に温泉のある村への立ち寄りを彼女たちが頼んだからとのことであった。車から荷物降ろす間も、3人は興奮状態。ノルウェー人ドライバーには盛大に手を振ってのお別れ、砂漠ツアーは大成功だった。

女性たちは、私の古くからの友人の奥様たちであった。私たちがいる「オマーンって面白そう」と3日前に日本からオマーンにやってきた。私は、彼女たちのために7泊8日の旅程を用意した。

初日は、マスカット着が23時過ぎだったので、そのまま私の家へ直行。

2日目に訪れたマトラスーク。2百年以上の歴史を誇るこのスークには、数百軒の店が

屋根付きの細い迷路のような小路に並んでいる。ハルワ（日本のういろうのような歯ざわりの銘菓）から乳香、香料、クンマ（縁無しのカラフルな布製帽子）、ハンジャル、なんでも売っている。珍しいものばかり。かつて「暗闇のスーク（Darkness Souq）と呼ばれたこのスークの雰囲気は、エキゾチック。その一角に、まばゆいばかりの金が飾られている店が何十軒も並ぶゴールド・スークは、奥様方にとっては垂涎の場所。

魚スークもユニーク。獲れた魚を積んだ漁船がスークの岸壁に横付け。スークには、その魚を売る店が何十軒も立ち並ぶ。魚の種類は多種多様。オマーンで1番人気のキングフイッシュ、ハマール（日本では最高級魚のクエ）、それにモンゴウイカなどが所狭しと並ぶ。隣接する野菜スークにも多種多様の野菜。また、ある一角には、生きた鶏がいる。売り子に「それ！」という、その場で絞めて捌いてくれる。日本にはない販売法！

続いて、アルブスタン・パレスホテルを訪れる。吹き抜けのロビーラウンジの壮大さには、度肝を抜かされる。日本では見られない豪華なラウンジだ。庭も素晴らしい。樹々や手入れの行き届いた芝生などもさることながら、アラビア海を望む浜辺が素晴らし。そこでオマーン料理と踊りを堪能、最高の時間を持つ。

3日目は、冒頭で簡単に触れた砂漠ツアー。

4日目に訪ねたのはナハル城。500を超えるオマーンの城砦の中で、世界遺産に登録されているニズワ城などとともにオマーン四大城の1つとされている。城主の部屋、奥方の部屋、見張り塔、デーツ貯蔵庫、退避用の井戸などなど興味深い。展示してある銃や刀などを、自由に手にとって鑑賞できるのも嬉しい。また、眼下のデーツ林や、その先のハジャール山脈の眺めも美しい。

5日目と6日目は、見どころ満載のマスカット市内観光。

車でマトラの町はずれで右折すると、1929年にオマーンで初めて舗装された山道に入る。そこを登っていくと、やや開けた場所がある。そこから眼下左手に、オールド・マスカットの街を一望できる。ここが16世紀から17世紀半ばまでポルトガルの植民地として栄え、その後ヤアーリバ朝、ブーサイード朝の下でインド洋海域での交易の中心であった街である。1キロ四方にも満たない広さの街。左手前にスルタン・カブースモスク、右手に王宮が見える。モスクの先にミラリ砦。その右前方には、ジャラリ砦がある。

夜になると、ポルトガルが建てたこの2つの砦はライトアップされる。暗闇のマスカット湾の海面にライトアップされた光が揺れる。そこは、幽玄の世界。

ルイの街は古い商店街が軒を連ねる喧騒の街でもあるが、銀行や会社のビルが立ち並ぶ一角は、さしずめ東京の丸の内のような場所。その近くに武器博物館がある。そこにはオマーンの軍事の歴史について、時代の順を追って、武器、制服、文書、勲章、記念品などが展示されている。それらも興味深い、屋外に出ると戦闘機や戦車が展示されている。日本では、武器を間近に見る機会がないので、目新しい。

ルイには、私がお気に入りのレバノン料理屋があった。

1月と2月は、オマーンでは最高の季節である。毎日晴れで、日本の初秋のような気候

が続く。夜のレストランの屋外の開放的な雰囲気。濃厚なネクター（果実をすり潰して作られるソフトドリンク）、鶏肉料理や鶏とヒツジのシャワルマ（羊肉や鶏肉を金属製の串に突き刺した状態で回転させて焼いた、レバノンやトルコの料理）は、絶品。

ルイの先には、クルムの街がある。ここにはオマーンの王族や有力者ちの豪邸が立ち並ぶ。日本でも「御殿」と呼ばれるお屋敷はある。しかし、アラビアの王族や有力者の家はスケールが違う。クルムも例外ではなく、そのような豪邸が立ち並んでいる。クルムの丘からの景色。眼下には、豪華なヨットが停泊。遠くにアラビア海に浮かぶタンカー。石油会社の社宅と隣接する砂のゴルフ場。海辺の開放的なレストランでの食事。

当時クルムのショッピングセンターは、マスカット一番の高級店が並んでいた。ここでは、「マサル」を商う店に案内。「マサル」とは、カシミアとウールなどのさまざまな色の生地、美しい手刺繍を施された1枚の布。オマーン男性はこれを器用にたたんで、ターバンのように頭に被る。これは、女性のスカーフとして好適。

次に、アムアージュを売る店へ行く。アムアージュとは、オマーンで作られている世界一高い香水である。男性用と女性用とある。高いものは、一瓶30万円もする。高級香水でも普通は成分が40、50種類と聞かすが、アムアージュの成分は約120種類。オマーン特産の乳香も入っている。それから、ペルシャじゅうたんを扱う店へ。

クルムを過ぎると、海岸沿いのシャテイ・アルクルムと山手のマディナット・カブースの美しい高級住宅街がある。前者は、白い壁と屋根が青色に統一されていて、後者は、白い壁と色とりどりの屋根が特徴。

そこを越えると、アルホエールの街。ここには、各国大使館とオマーン政府の建物が並ぶ。さしづめ、オマーンの霞が関。この街の山の方では、オマーンの典型的な景色を楽しむ。山の麓にナツメヤシの林が立ち並び、奥の方に行くと部落があり、その手前に部落を守る見張り用の砦がある。部落に入るとワジ（涸れ河）に水が流れている。マスカット市内では、こういう山村の風景も経験できる

私の家は、山手のマディナット・アラームにあった。マスカットの大動脈であるマディナット・カブース通りをクルムを過ぎてから左手の坂道を登った場所にある敷地300坪超、白壁の瀟洒な2階建てで回廊のある建坪80坪の建物。白い扉の門を入ると、左手に車3台入る車庫。1階には応接間、食堂、台所とトイレ。2階には夫婦の寝室と客用の2寝室があり、各部屋には浴室とトイレが付いていた。裏手にキッチン付きのメイド居住用の建物。その先には花壇があり、建物の左手には、大きな樹々が何本も植えられていた。水やりには、フィリピン人のメイドとは別に、インド人の庭師が毎日わが家に通っていた。

奥様方には到着した夜から6日目の夜まではわが家に泊まってもらったが、せっかくだからと7日目は中東随一のアルブスタン・パレスホテルへの宿泊をすすめた。

その夜は、ホテル内のマスカットで最高級のフレンチ・レストランでフルコースを予約。参加者は、家内も入れて4人の女性たちと私。それに、たまたま日本からマスカットに出張してきた日本の大手製鉄会社の男性社員にも、加わってもらった。

その日は、ある奥様から、「今日は私の55歳の誕生日なの！」との申告。さっそく、誕生日用のケーキも注文。ワインに、フルコースのフランス料理、誕生日祝いのケーキカット、その上比較的若い男性も同席し、楽しいひとときを過ごした。

夜は、古き良き時代のハリウッド映画で見るとような、アラビック・スタイルの部屋でのアラビアン・ナイト。日本では味わえないロマンティックな雰囲気の中での一夜。

かくして、奥様方のオマーンの旅は終わったのであった。

お一人の方のご主人は前年仕事でオマーンに来ており、アル・ブスタン・パレスホテルにも泊まったとのこと。奥様がオマーンに行くと言ったら、「あんなところに行ってどうするの？ なにもないよ！」と言われたそう。「嘘ばかり」と言うのが、旅行後の奥様のコメントであった。

奥様方は大満足。最高に楽しかったのは、ご主人抜き旅行であったことと、皆さん同じ年ごろで「元女学生の修学旅行」というような特殊要因もあっただろう。だが、マスカットがクリーンな町であったこと、稀有な自然の景観、砂漠、歴史的な街並みや城、珍しい土産物、豪華なホテル、治安の良さ、オマーン人が開放的で人懐こく人柄がよいことなどが挙げられよう。

それに、連夜、ワイン付のおいしい食事をとりながら、「自称ハンサムなプロフェッサー遠藤のアラブ講座も、滞在を楽しくした一因だったかもしれない」と自画自賛している。

「オマーンには、何にもないよ」どころではなかったのであった。こう言ったご主人は、オマーンに来て仕事ばかり。オマーンで、仕事以外何一つ見ていなかったものであった。

## 8-8. 三世代がアラビア半島に - 急速に変貌するアブダビの街

1994年10月に、生後4ヶ月の孫悠太朗が日本からオマーンにやって来た。アブダビにすでに赴任している父親に合流すべく、日本で彼の出産に付き添っていた家内と母である次女智子に連れられて、まずは私があるマスカットにやってきたのだった。

孫は、オマーンに着いてすぐに熱を出した。4ヶ月半の赤ん坊にとって、日本からオマーンまでの長旅は緊張の連続だったに違いない。それにしても、20年経って親子が同じ経験をするとは。1975年に当時赴任中の私に合流すべく日本からやってきた次女智子、つまり、この孫の母親も、ペイルートに到着するなり熱を出してしまったことがあった。歴史は繰り返すものだ。

その後、次女が孫を連れてアブダビに向かいそこに住み始めると、私たちの家族は中東とイギリスに分散した。19歳の時に脳梗塞という大病をした長女は、結婚して1982年以來イギリスに住んでいたし、私と妻がオマーンに、次女一家はアブダビに住むことになった。しかも、アラビア半島では、祖父母、父母、その子供と3世代が暮らすことになった。当時アラビアに3世代で住んでいた日本人は、私の一家だけではなかったかと思う。

その月の中旬に、私と妻は、次女一家の様子を見るために車でアブダビに行くことにし



た。マスカットからアブダビへの陸路にはドバイ経由とアライン経由の2つの行き方があるが、私は後者を選択した。まず、マスカットからオマーン海沿いに当時珍しかった片道2車線の素晴らしい道路を北上。230キロ進んで、シンドバッドの出生地といわれているソハールへ。その先を左折すると、今度は山道が続く。ワジ・ジジに沿って西へ約100キロ行くと、オマーンとアラブ首長国連邦の国境。そこから、約170キロ走ってアブダビに到着した。500キロ強の道程であったが、妻と運転を交替しながらの約7時間のドライブ。アブダビは、仕事で1982年から1991年まで毎年訪れていた場所。私にとっては2年ぶりの訪問であった。

夜8時ごろに車はアブダビと思われる市街地に入ったが、運転していた私にはそこがアブダビだとは確認できなかった。街の様子が、すっかり変わっていたのである。道路が広がり、建物も増え、街の灯りも格段に増えていた。そのうちに、うっそうたる街路樹のある片側4車線の立派な道路に入り、やがて煌々と明かりが灯る高層ビルが林立するのが眼前に見えてきた。その手前には、立体交差道路と交差して地下自動車道路が延びていた。

以前3年間近く住み、前の訪問から2年しか経っていないのに、自分が街の何処を走っているのかまるで見当がつかない。すごい変わり様であった。その頃アブダビでは300以上ものビルが建設中だと聞いたが、アブダビは文字通りの「アナザー・シティ」に生まれ変わりつつあった。

アブダビ滞在中に、以前次女智子を嫁に欲しいと言ってきた旧友のアブドラー一家を訪ねることにした。当日は、たまたま金曜日で休日。10数年前ぶりに突然連絡をとったのだったが、「昼に家族や親戚と一緒に食事をするので、自宅に来ないか」と言ってくれた。アラブのホスピタリティ精神は健在であった。

訪ねた家は、豪邸であった。あの時に「41室ある家を建築中」と言っていたが、これがその家だった。着くなり私は男性たちの部屋へ、妻たちは女性たちの部屋に案内された。男性たちは、10数年経ってすっかりおじさんになっていたが、私の家に遊びにきたことなどをよく覚えていて、昔話に花が咲いた。

アブドラーは陸軍の准将に昇進していたが、アブドルクリームは、37歳ですでに警察を引退していた。次女智子に求婚したセイフは27歳になっており、すでに3人の子持ち。次女とのことに話が及ぶと、ややはにかんだ表情をみせた。

女性たちの方は、以前私の家を訪ねてきたお母さんも元気。ダビラは、18歳で結婚してすでに5人の子持ちとなっていた。妻たちのことを懐かしがってくれたという。

アブドラーの5歳の女兒が心臓の治療のために、付き添いの叔父夫婦と一緒にその晩アメリカに発つと聞いた。お金はすべて国が負担。彼らが乗っている車はベンツ、アウディ、BMWなどすべて高級外車。引退したアブドルクリームは、釣りを楽しんだりの悠々たる暮らしぶりだった。アブダビの街のビルラッシュのみならず、アブダビ人の金持ちぶりにはいまさらながら驚いた。

その日の夕方、私は次女を連れて旧友のサガーを訪ねた。「これからアブダビに住む娘を

よろしく」との趣旨であった。彼とも2年ぶりの再会。

次女を、広大な彼の屋敷内の別棟に住む彼の長女に紹介して貰った。私と次女が訪ねると、「上がって」と彼女がいきなり玄関口に出てきた。ブルカはつけていなかった。さすがUAE大出の才媛、英語もOK。女性も開けてきたなと強く感じた。

別室で女同士で話をした次女によると、彼女は男の子と生後5ヶ月の双子の女の子の母親。妊娠してからベルギーの病院へ定期健診に通い、出産もその病院でしたとのこと。「お金持ちね。アブダビからわざわざ外国に行って出産しているのね。ここにいる日本人の中には、旅費の余裕がなくてアブダビで出産する人もいるなんて話できないわ」と次女は言った。これも国の金なのか、金持ちの父親が出したのかは確かめなかったが、またもやアブダビ人の金持ちぶりに驚いた。

### 8-9. オマーンでの任期满了 - 献身・勤勉・規律の3Dを

1994年12月の初めに、翌年1月の任期满了による日本への帰国を前に、勤務先の商工省、何回も通った工業団地や商工会議所、ビジネスマンや個人的に世話になったオマーン人約30人、知り合いの欧米人やインド人数名、それに大使館、JICAの同僚や知人の日本人約20人を招待してわが家の庭で謝恩のフェアウェル・パーティーを開いた。

設営、ケータリングサービス一切をシェラトンホテルに依頼し、その上に日本料理店「東京太呂」からの寿司の出前店を加えた。

気候は最高。晴れで気温は夜でも20℃は超えていた。ライトアップされた庭先に置かれたテーブルの上には、各種料理と寿司。蝶ネクタイをしたホテルからのボーイも数人控えていた。私と妻は、あちらこちらにできた人の輪を「お世話になりました。ありがとうございました」と感謝の気持ちを込めて別れの挨拶に回った。

12月の終わりになって、商工省工業局では私の送別会を開いてくれた。場所は、商工省大会議場の入口にあるホール。会の幹事は、中小工業振興部次席のマラック女史。この送別会は50人を超えるオマーン人、インド人、スーダン人などの職員が3リアル、5リアルと金を出し合って開いてくれたとか、感謝であった。

アリ局長が挨拶をし、商工大臣の感謝状を読み上げる。大臣とは、その後別途会うこととなっていた。ついで、大臣顧問、局長顧問、アハマド部長が次々に別れの言葉を述べた。

いよいよ私の番。私は3年間、業務の一環として日本の5S（整理、整頓、清掃、清潔、躰）運動をオマーンで展開してきた。私の別れの言葉は、5Sではなく、3D、Dedication（献身）、Diligence（勤勉）、Discipline（規律）であった。オマーンのエリートである私のカウンターパートたちには、「これらの言葉を胸に、故国オマーンのために頑張ってもらいたい」という願いを込めたものだった。

ついで、オマーンの古い銀製の火薬入れを収めた額をもらう。素晴らしい贈り物であった。聞くところによると、「ミスター・エンドーは、オマーンのものなんでも持っている。

プレゼントは、珍しいものを選ぶように」と事前にアリ局長からマラック女史に指示があったとか。

当日は飲み物や食べ物がたくさん用意されていたが、「ミスター・エンドー、さようなら」という文字が書き入れられたケーキまで用意されていた。10人ほどのオマーン人女性に囲まれながら、私はケーキにナイフを入れた。そして、女性たちと写真撮影。

「本当にみんなありがとう。おかげでよい仕事ができた。みんなも世のため、人のために、3Dを忘れないで尽くすように」と願って、私は仲間たちに別れを告げた。